

資 料

パ リ

—— 誕生から現代まで ——

[XXX]

P.クールティヨン 著

金 柿 宏 典* 訳注

ラ・ベル・エポック (1)

1900年、シャン・ド・マルスからアンヴァリッドの広場まで、パリは「装飾の都市」*cit  du d cor* に変身する。パリは、湿った灰色な年の最初の1年後に生れた物理学のこの世紀に手本を示したのである。パリは人類の知識の普遍性に人々を招待する祭典となった。4月14日、万国博覧会において、ラ・モト・ピケ大通り¹⁾に、真赤の布で覆うわれた土台の上に、大統領のための壇がつくられた。ミルラン²⁾、ファリエール³⁾、デシャネル⁴⁾らに囲まれ、ルベール大統領⁵⁾が入場する。国立音楽学校のオーケストラが、ラ・マルセイユーズの演奏を開始する。エリゼ宮への帰館は、アレクサンドル3世橋⁶⁾の落成式になる。

人々は大スペクタクルを展示する会場を見て感動する。首都は反対に、来訪者に一種の夢の町、趣味と装飾と舞台装置の七色に輝く大都会を提供する。それらは、各国のパヴィリオンが並ぶセヌ河畔に、その眺望を提示している。ギャラリー、宮殿、機械類、エクゾシスムの産物すべてが、そこに展示されていた。ただ、喧騒の渦巻くバラックが密集している通りだけが、この豪華絢爛の例外となっている。パリの魅力が、その歴史の流れの中でこの都市にふさわしい多くの装飾句に加わった。新動力の電気がその分配者になる。

* 福岡大学名誉教授

光のスペクタクルが、その輝きと音響の中であらゆるものを変え、そして再び創造している。7月19日、エクトール・ギマール⁷⁾創作の鉄製の装飾品をまとめて、地下鉄が営業を開始した。これはパリ市民の生活や習慣を何から何まで変えてしまうことになる。

それは大車輪を建造した偉大なる技師の技術と鉄骨建造物の支配する時代である。5月1日、万国博覧会が利用する方針で建築されたグラン・パレ⁸⁾とプチ・パレ⁹⁾の落成式が挙行される。グラン・パレはその形式ですべての成功を手中にしたが、プチ・パレは高い基壇の上に乗っている円柱のコロナードでより独創性をもっている。また石の上に置かれた気球のように広がったガラスのケージや、柱廊の下にある瑠璃製の帯状装飾のモザイク、さらに屋根の上で堂々と躍動している馬の彫像などもまた独創的である。万博に対して、君主たちが多数参加している。スウェーデンのオスカル国王¹⁰⁾、ベルギーのレオポルド2世、トランスヴァール共和国（南アフリカ連邦）、金鉱とダイヤモンド鉱山の国の大統領クリューガーである。

街の装飾

街自体がさまざまな色彩で陽気になっており、通行人たち——自転車に乗ったり、最初の小型車に乗った人たちにさえ——粗いタッチで描かれたポスターを見せつけている。ポスターは到る所に、壁、塀、モリス広告柱¹²⁾に貼りつけられ、更に大通りのあちこちに立っているサンドウィッチマンによっても掲げられていた。80年ほど以前から出現したポスターは、今や自分の王国を所有し、買って欲しいものすべての陳列箱となった。飲んでもらいたいシャンペン、読んでもらいたい小説、着てもらいたいコルセットなどなど。それらにはシェレ¹³⁾、ロートレック¹⁴⁾、ボナール¹⁵⁾、スタンラン¹⁶⁾のサインがある。最新作は黒の輪郭線で強調された宗教的様式を示し、そこに描かれた「選ばれた女性」や少々象徴的な花盛りの娘たちは、アイリスやオウシュウヤドリギの球形の装飾や椿でできた飾りに取り囲まれていた。

パリの喜劇というリトグラフのシリーズで、フォラン¹⁷⁾は容赦のないタッチで、空腹な画学生のアトリエやオペラ座の舞台裏や個室の内で展開されたパリの恋の諸相を目もあざやかな諷刺画に仕上げている。

ポスターの中に少し黒ずんだものが一枚ある。それはモンマルトルの丘のサクレ・クール寺院から眺めたような、眼下に広がる夜のパリの光を背景に、自分の「女神」であるお

針子と詩人が抱きあっている情景を描いているが、ヴァンサン・ヴァン・ゴッホ¹⁸⁾もこの場所でパリを描いている。オペラ・コミック国立劇場で、掲示板がギユスターヴ・シャルパンティエ¹⁹⁾作のミュージカル『ルイズ』*Louise*の上演を告示している。初演は2月2日で、万博開会の数週間前だった。この作品はパリの心臓の鼓動を伝えており、「都市の中の都市」の音楽的肖像である。

しかし庶民を愛しているある写真家は、—— 彼らはあくせく働いているが、常にパリに彼らの心と歓迎の気持を与え続けている人々なのだが、—— 彼らの仕事、彼らの街のささやかな飾りつけの映像を創造するために、これらのつましい人々に奉仕するために全力を尽したのである。彼はユージェヌ・アッジェ²⁰⁾といい、カンパーニュ・プルミエール街²¹⁾に住んでいた。幾つかの小劇場で端役の代役をした後で、このパリの愛好者は、税関吏のアンリ・ルソー²²⁾が橋や河岸を描いたように、それに劣らぬ見事さで街路の石畳、橋、古い教会、河岸、カフェを写真にとり、それらの忘れ得ぬ風景を残すことになる。

モードと演劇

モンマルトルで、観光客たちはエレガントな女性たちとすれちがう。彼女らはドガが描いたように娯楽場の「冬の庭園」の椰子の並木の下で、きらめく氷やまばゆい照明を楽しむためにやってくるのである。人々はそこでムラン・ルージュ²³⁾のカンカン踊りを見ようとやってくる。ラ・グリユ、ニニ・パット・アン・レール、ヴァランタン・ル・デゾセ、ラ・モヌ・フロマージュなどトゥールーズ・ロートレックの画でお馴染のダンサーたちがいた。ディヴァン・ジャポネ²⁴⁾では、朗読家のイヴェット・ギルベール²⁵⁾（トンボの体のように細い柳腰で、黒手袋をして入場）が、ナドー²⁶⁾の詩句を細かいニュアンスを出しながら朗読するのを聞くことができる。人々はブリュアン²⁷⁾の店で彼からどやされたり、ユジュニー・ビュフェが嘆きの哀歌を朗唱するのを聞くのだが、彼女は上半身をおこし、両手をエプロンのポケットに入れたままである。ポラン²⁸⁾はアルカザールで歌っていたが、赤いパンタロンをはき、頭に軍帽をかぶり、格子縞のハンカチをポケットからのぞかせていた。レミ・ド・グールモン²⁹⁾は『仮面の書』³⁰⁾ *Le Livre des masques* で価値ある作家たちを紹介しているが、有名作家ではなく、「メルキュール・ド・フランス」³¹⁾誌上で話題になり、画家のヴァロトン³²⁾が白と黒の線でその肖像を描いている作家たちであ

る。

女性たちの間で、体は細くほっそりとなり、あご紐のついた縁無しのカポート帽は前がそりかえり、髪形は高く結い上げ、リボンで覆われる。エルーは社交界の女性のためにデザインするが、その外出着は、イギリス風のシャツブラウスの上に大きく開いた襟のついたスコットランド風のテーラードスーツである。彼女は飾りリボンのついたパラソルを楽しみ、胸をはり、帽子から垂らしたヴェールの下のほど良い箇所口を押しつけて歩を進めた。夜会のために、ドーセ³³⁾は駝鳥の羽飾りをつけた豪華な帽子のついたケーブを発表したが、その姿はポッティニ³⁴⁾の描く水彩画の中に見ることができる。これに黒の靴下、布地をたっぷりつけた下着の中でふくらみをみせているガーター、雪のように白いベチコートが加わって全部である。

次はフォリ・ベルジュール³⁵⁾やカジノ・ド・パリ³⁶⁾の姫君たち、高級な美女たちの一行がくる。美しきオテロは、緑の絹の衣にちりばめたダイヤで輝きながら、「自殺にひきこむセイレン」のように体をくねらせながらオランピア劇場³⁷⁾に登場する。魅惑的なリアヌ・ド・プギは、全身を白い羽飾りと真珠で覆った（彼女は、ローザンヌでフランチェスコ派の付添い尼の粗衣を纏い、ギカ王女³⁸⁾として死亡する）。クレオ・ド・メロードは薄布の長いヘヤバンドをつけ、奇抜なブラウスで胸を覆っていた。エミリエヌ・ダランソンは、ベルギー国王レオポルドの意中の人だった。ミュージック・ホールや劇場のこれらの女王たちの中で、パリの豪華さが偉大な勧誘員となり、シャンソン作者はその測定値を示している。

「ウエストは46,
体重は100リーヴル足らず
白魚の指をもつ手は
サイズ4分の3が5本」

サラ・ベルナールは、男役のぴったりにしたキュロットをはいて、『鷺の子』³⁹⁾を演じる。フランス座で、ムネ・シュリ⁴⁰⁾が大役を堂々と演じている。セシル・ソレル⁴¹⁾は舞台の華である。ポレールはクロディヌ⁴²⁾を演じる。小さな折返した襟と黒いスモッグに水玉模様の大きな蝶結びのネクタイをしめていた。

ヨーロッパ座で、ドラナン⁴³⁾は、「ブー・ドゥ・バ・ダ・ブー」*Bou dou ba da bou*を歌っている。メリエ⁴⁴⁾は『月世界旅行』*le Voyage dans la lune*の映画を上映する。ピガール広場⁴⁵⁾では、天使やキリストたちがモデル市場に自分を売り込んでいる。

それは人呼んでラ・ベル・エポックという時代で、マキシム⁴⁶⁾の店内にみられるトンボ・スタイル、ドーリア式滴状装飾のピアノの脚、バン⁴⁷⁾やマジョレル⁴⁸⁾作のトネリコ材や梨材で作った蜂窠状の家具類、蝶の羽のような椅子類、ガレ⁴⁹⁾作の花瓶類、ボテ作の彫金細工はキューピッドの行列に導かれた子供のニンフや牧羊の横顔を刻んでいる。「全体がシック」な内部は、錦織りの刺繍のあるカーテンや白熊の毛皮で装飾されている。ソファーはクッションの山に埋もれて見えないくらいだ。

ロシア・バレエ

『ペレアス』*Pelléas*⁵⁰⁾の革命後（というのもこれが最も論議を呼んだものの一つだった）、パリは世界の舞台になる。パリに來たモスクワ出身の人物が、完成したばかりの「秋のサロン」*Salon d'automne*で、ロシア芸術部門を構成した。セルゲイ・ジアーギレフ⁵¹⁾は、古典的振り付けを打破し、新作をパリに提供しようとしていた。彼は『千一夜物語』*Mille et Une Nuits*、聖書、ロシアの豊かな民俗音楽や素朴なリズムから靈感を得て、バクスト⁵²⁾やブノワ⁵³⁾の舞台装置の中で、1909年、ストラヴィンスキー⁵⁴⁾作曲の『火の鳥』*L'Oiseau du feu*でサラ・ベルナル劇場において偉大なるロシア・バレエのシーズンを開幕した。傑出したダンサーたち、ニジンスキー⁵⁵⁾、ラ・カルサヴィーナ⁵⁶⁾などがスターだった。白一色のチュチュは最早無かった！ 衣裳における創意と色彩！ 振り付け独善もなし！ バレエの公演の度に、これ以後は論争が起った。

偉大なる事業の多くがそうであるように、ロシア・バレエも新奇なものが好きな上流社会のスノビズムにより認められる。ジアーギレフを上流社会に紹介した後見役は、カラムン・シメー⁵⁷⁾出身のグレフェル伯夫人で、ブルーストがアストローク街⁵⁸⁾の彼女のサロンに登場させて、ゲルマント公夫人⁵⁹⁾として描いている。彼女はジアーギレスが勝利をおさめた夜の提供者だった。こうしてロシア・バレエをデビューさせるため、彼女はマルセル・ブルースト、オーギュスト・ロダン⁶⁰⁾、オディロン・ルドン⁶¹⁾、ノアイユ伯夫人⁶²⁾、レイナルド・ハーン⁶³⁾、ジャック・エミール・ブランシュ⁶⁴⁾、印象派の画の蒐集家アイザック・ド・カモンド⁶⁵⁾らに宣伝を依頼したのである。バレエ団の舞台監督ガブリエル・アストリュックは、ホールに初めてオーケストラ・ボックス前の3列目の1階の席「コルベユ」を設け、そこに金髪と赤髪のパリで最も綺麗な女優たちを交互に座らせたのである。拍手の瞬間に、ロベール・ド・モンテスキュー⁶⁶⁾、「いとしのロベール」の白手袋と

金色の握りのついた杖がオーケストラの上に飛び上る。

同じ頃、ポワレ⁶⁷⁾はこの時代の服をデザインする。スカートを狭くし、コルセットを追放し、女性たちを派手な色の布地で彩る。マーテルランクの妻ジョルジェット・ルブランのようなある種の女性たちは、自分たちのピアノ・カバーのような布地の服を着て物憂げな様子をしていた。

パ　　リ

— 誕生から現代まで —

(訳　注　XXX)

1) avenue de La Motte-Piquet : 第7区から第15区に通じ、グルネル街とグルネル大通りを結ぶ、長さ1,390米、幅34米の道。この道は、1680年頃、グルネル街と現在のジョッフル広場の間にあったが、士官学校が建築された(1752-57)後の1775年に延長され、現在の姿になった。1791年に海軍中將 Guillaume Piquet de La Motte (1720-1791) の名をとって命名された。

2) Alexandre Etienne Millerand (1859-1943) : パリ生れの政治家。1881年に弁護士となり、多くの大事件を手がけて有名になり、クレマンソーの「正義」紙 *La Justice* に寄稿し、ジャーナリズムにも進出した。1885年パリ選出の議員として社会党左派の領袖となり、労働問題に関心を持った。彼は普通選挙による平和的手段で権力を奪取する事を主張した。1899年6月、ヴァルデク・ルソー内閣の商相(1899-1902)となるが、ジュール・ゲードらが社会党を離脱し、社会党は分裂した。在任中に彼は多くの労働条件改善の立法を実現したが、1900年3月31日は立法の1日11時間から10時間に労働時間を短縮した事は注目に価する。ブリアン内閣の公共事業相(1909-11)として鉄道の国営化を実現した。ポアンカレ、ヴィヴィアニの両内閣で陸相(1912-13, 1914.8, 1915.10)、第一次大戦後の選挙(1919.11.)でブリアンらと右翼を糾合し社会共和党を結成、ヴェルサイユ条約の厳密な実行を主張した。11月16日の選挙に勝利し、ポワンカレから組閣を命じられ、首相となった(1920.1.-9.)。しかし激動する社会に直面しなければならず、C.G.T.の解散を試みている。無能なデシャネルに代り大統領に選出されたが(1920.9.24)、大統領権限の強化を目指した彼は、ドイツとの和解に反対してブリアンと袂別、議会の立法権の縮小を計って議会と対立、1924年5月11日の選挙に敗北し、任期中に辞職した(6.11.)。上院議員(1925-40)となるが、重要な役割は果していない。

3) Clément Armand Fallières (1841-1931) : 南仏のロット・エ・ガロンヌ県メザン出身。ネラックで弁護士を開業、1876年に同県選出の代議士となり左派共和派に属した。1883年3月に首相に就任してからも多くの閣僚職を歴任した。内相(82-83,87)、文相(83-85,89-90)、法相(87-88,90-92)。上院議員(90-99)、次に同議長(99-1906)、その後共和国第8代大統領に当選(1906-13)した。ブリアンやポワンカレの強

力内閣を組閣させ、共和政の民主化やモロッコ問題の解決に努力した。ポワンカレに大統領を譲った後、政界から引退した。

4) Paul Eugène Louis Deschanel (1856–1922)：ブリュッセル生れ、父はコレージュ・ド・フランスの近代文学の教授のエミール・オーギュスト・エチエンヌ・マルタン・デシャネル (1819–1904) で、ナポレオン3世のクー・デタに反対してベルギーに亡命、ブリュッセルなどで公開講演会を開き、亡命中のユゴーやキネーなども聴講している。デシャネルは1885年に代議士に当選、進歩党指導者として下院副議長 (1896–98)、同議長 (1898–1902, 1912–20) と歴任し、大統領選挙で対立候補クレマンソーを破り、共和国第10代大統領に当選した (1920.1.18.)。クレマンソーはこの敗北を機に政界を引退した。しかし大統領に就任したのも束の間、神経衰弱で、9月21日に辞任しなければならなかった。

5) Emile Loubet (1838–1929)：ドローム県マルサンヌ出身の農民の子で、弁護士となり、モテリマール市長 (1870)、1876年に代議士となり穏健な共和派に属し、1885年には上院に移籍した。小市民的良識と穏和で敵をつくらぬ性格から多くの議員の好感を得て、公共事業相 (1887–88) を経て首相に任命された (1892.2.–11.)。再び上院に入り (1894)、同議長となった (1896–99)。フォール大統領の死後、共和国大統領に就任した (1899.2.18.)。ドレフュス事件を決着させ、国家主義と共和主義の対立を融和させ、第3共和政の基盤を安定させた。ヴァルデク・ルソー内閣、コンブ内閣を指導し、政教分離や植民地問題などの内外の諸問題を解決、国際的には、イギリス、ロシアとの友好関係を樹立し、フランスの地立を高からしめた。

6) pont d'Alexandre III：第7区のオルセ河岸とクール・ラ・レーヌを結ぶ、長さ106米、幅40米の橋。1896年10月7日、ロシア皇帝ニコライ2世と皇后アレクサンドラ・フェオドロヴナとフランス共和国大統領フェリックス・フォール大統領の臨席の下、コメディー・フランセーズの名優ポール・ムネが、ホセ・マリア・エレディア作の詩『皇帝への挨拶』を朗唱、皇帝が特製の金の鍔と金槌を使って起工式を挙行了。1824年から26年にかけて、この地点に橋を架けようとする試みがあったが、これは失敗している。パリ万博を記念して、ロシア皇帝からパリ市に寄贈されたこの橋は、ニコライ2世の父を記念してその名が冠せられ、アレクサンドル3世橋となった。ナポレオンを祭るアンヴァリッドの正面になるこの橋が、ナポレオンの仇敵だったロシアから寄贈されたのも、運命の皮肉といえようか。

アンヴァリッドの建物と前庭のエスプラナードの中心軸の延長に架橋されたため、この

橋はセーヌ川の流れを少々斜めに横断している。これは橋の建設を布告した条文に、アンヴァリッドの眺望を妨げない事、という条件が第一条に明記されているからである（1846年10月5日の布告）。さらにセーヌ川の景観を損なう事が無いようにする事、シャンゼリゼから開通予定の幅100米の道路とバランスのとれた幅をもつ事という条件が追加されていた。

土木委員会は、慎重な討議の結果、レザルとアルビの設計の採用を、1896年12月に決定した。工事は、1897年3月30日、河岸の土手を崩す事から開始された。工事は順調に進み、1899年12月8日には、20トンの荷を積んだ5頭立ての車28輛を使って、橋の耐久力のテストをする段階になる。17米の装飾柱の上部に群像を据えつける工事は、1899年12月26日から1900年3月28日の間に行われている。1900年10月29日付の「エクレール」紙 *L'Eclair* は、この橋の建設に従事した人々に賛辞を送っている。

7) Hector Guimard (1867-1942) : リヨン生れの建築家、装飾家。伝統的因襲的装飾に反対、新美術 Art Nouveau を提唱、1897年から98年にかけて建造した le Castel Béranger では、煉瓦、鋼鉄、石材、セラミックなど多様な素材を活用、細部に至るまで花や植物の図案をちりばめ、全体をたおやかな曲線で形成し、幻想的效果を発揮した。特に地下鉄の入口の鉄製の曲線を活用した門は、現在でもパリ市内の地下鉄の入口を飾っている。

8) le Grand-Palais : 第8区のウインストン・チャーチル大通り（旧アレクサンドルⅢ大通り）に面し、プチ・パレと向い合っている。この2つの建物は1900年の万博のために建設された。この敷地には、1855年の万博のために建設された「産業宮」palais de l'Industrie があった。この産業宮は、1878年と1889年の万博にも利用されたが、1900年の万博の敷地として使用するため1897年に取り壊された。グラン・パレ、プチ・パレ、クレマンソー広場、ウインストン・チャーチル大通りは、すべてこの産業宮の跡地に建設されたものである。

グラン・パレの建設は、1897年から1900年にかけて行われ、その後は各種の展覧会や展示会に使用されている。イオニア式の円柱の並ぶ正面は、幅240米、高さ20米、屋上に据えられた巨大な4頭立ての2輪戦車は圧観である。ガラス張りの中央ホールの円天井は高さ43米で、当時の人々にとっては驚異的だった。ウインストン・チャーチル大通りと反対側のフランクリン・ルーズヴェルト大通りの入口には、フェルギエールとペテル作の騎馬群像が中央のポーチを飾っている。

9) le Petit Palais : 第8区のアレクサンドル3世大通り現在のウインストン・チャーチル大通りを挟んでグラン・パレと向き合っている。この建物もグラン・パレと同じく1900年の万博のために、1897年から1900年にかけて建造され、建築家はジローである。正面の長さは130米で記念建造物にふさわしいポーチをもち、アンジャールベールやサン・マルソーの製作した彫刻が飾られている。現在はパリ市美術館となっており、18世紀の家具や綴れ織りを集めたテュック・コレクション、七宝細工、陶磁器を集めたデュテュイ・コレクションが展示されている。またパリ市所蔵のアングル、ドラクロワ、クールベ、バルビゾン派、印象派の絵画も陳列されている。南の大ギャラリーは、ギュスターヴ・ドレの歴史画、宗教画を展示している。グラン・パレに対して広さでは半分もないが、イオニア式の列柱を備えた建物全体は、より調和のとれた美しさを持っている。

10) Oskar II (1829-1907) : スウェーデン王 (1872-1907)、ノルウェー王 (1872-1905)。オスカル1世 (1799-1859) の3男で、兄シャルル14世の跡を継いで即位した。スウェーデンとノルウェーの連合の維持が困難となり、ノルウェーの王位をホーコン7世 (1872-1957) に譲位した (1905)。彼はデンマーク国王フレデリク7世の次男だった。オスカルは文才があり、文学や音楽を愛し、詩、戯曲を創作、ヘルダー、ゲーテ、シェイクスピアなどの作品も訳している。

11) Stephanus Johannes Poulus Krugar (1825-1904) : 南アフリカの政治家。オーム・パウル (Oom Paul) の名で有名。ケープ植民地に18世紀頃に移住してきたオランダ系家族の出身。厳格な清教徒の教育を受け、これが彼の生涯を貫く精神的支柱となった。両親と共にトランスヴァールに移住し、黒人との戦闘と狩猟に熱中した。イギリスの進出を阻止すべく反英的態度をとり続け、かえってイギリスのトランスヴァール侵入の口実を与えてしまった。トランスヴァールがイギリスに併合 (1877) されるや、武力による独立運動を展開し (1881-81)、トランスヴァール共和国大統領に選出され (1883)、続いて3選される (1888, 93, 98)。強固な反英政策を堅持、トランスヴァール発展のため不可欠な移民政策でイギリスと衝突、オレンジ共和国との同盟と、セシル・ローズと共謀しクリューガー打倒を目指して進入してきたL.S. ジェームソン (1853-1917) の攻撃を撃退し、ジェームソンを捕虜する勝利で自信をつけたクリューガーは対英戦争に踏みきったのである (1899-1902)。しかしイギリス正規軍には歯が立たず連戦連敗、彼は援助を求めため、ヨーロッパ各国を歴訪した。各地で民衆からは熱烈に歓迎されたが、政府からは冷遇され、援助は全く得られなかった。彼は大統領を辞任、亡命先のスイスのクラレンス

で客死した。

12) colonne Morris : パリの街頭でみられる円柱状の小建築物。権利を買った者がその上に市内の催し物のポスターを貼った。モリスは印刷屋で、ポスターを貼る最初の権利を得た人物。

13) Jules Chéret (1836-1932) : パリ生れのポスター画家、装飾家。1855年に白と黒の線画のポスターでデビュー、1858年には「地獄のオルフェ」*Orphée aux Enfers*で3色を使用した。1859年から1866年までロンドンで暮し、カラーのリトグラフの手法を学ぶ。彼の創作したポスターは千枚以上になるが、共通したテーマは魅力的な女性を描いてエロティシズムを漂よわせた傑作で、生き生きした表現と軽快なタッチで、1900年の美術史の流れのなかで注目に価する。

14) Henri Marie Raymond de Toulouse-Lautrec Mofa (1864-1901) : 南仏タルヌ県アルビの出身。各門貴族の家に生れたが、少年時代両脚を骨折し発育の不具者として一生を送った。少年時代はルネ・プランストーについて動物画を学んだ。1882年パリに上京してからはコルモン (1845-1924)、次にボナ (1833-1922) に学んだが、アカデミックな画風に不満を抱き始めた時、ドガやゴッホを知り強い感動を受け、また日本の浮世絵にも魅了された。モンマルトルに定住してから、カフェのコンサートやダンス・パーティー、劇場、ミュージック・ホール、寄席やサーカスに通いつめ、そこに出演しているダンサーや芸人やお客たちの姿をエスプリのきいた辛辣なタッチで描いた。パリの夜の歓楽街とその風俗を描いた第一人者で、特に劇場やダンス・ホールのポスターは、最高の広告媒体の傑作とされる。

15) Pierre Bonnard (1867-1947) : 役人の子として生れ、最初は法律を学んでいたが、1888年以降は画への興味押えがたくジュアン画塾に通い、ヴェイヤール (1868-1940) らと知り合った。彼の感化でナビ派に加わり、日本の浮世絵からも影響を受けた。「フランス・シャンパーニュ」France-Champagneのポスターの成功は、彼に画業に専心する決意をさせた (1889)。徐々にナビ派から離脱し、家庭生活の情景や風景などを豊かな色彩を使って描き、「色彩の魔術師」と呼ばれるようになった。当時興隆しつつあった抽象画の運動から超然と独立し、あくまで静寂で平和な雰囲気醸成している彼の具象画に対しては、画壇の革命を叫ぶ人たちからも尊敬されていた。

16) Théophile Alexandre Steinlein (1859-1923) : スイスのローザンヌに生れ、フランスに帰化した。19歳でパリに上京 (1878)、工業製品のデザインをしながら、多くの

新聞に寄稿、特に猫のデッサンで注目されてから、デッサン画家を志し、多くのポスターを作成し人気者になった。彼の作品には当時流行していたジャポニスムの影響が強くみられる。モンマルトルの酒場「黒猫」Le Chat Noirの常連として、パリの夜の歓楽街の風景を描いている。また当時の人気歌手アリステッド・ブリュアン（1851-1925）の歌集『街にて』*Dans la rue*（1888-95）の挿絵を描いている。ドーミエと特にロートレックの愛好者で、彼らの作品を凌駕せんと努力した。1900年代のよき証言者の一人である。

17) Jean-Louis Forain（1852-1931）：ランス生れの画家、デッサン画家、版画家。ヴェルレーヌ、ランボー、ユイスマンスらの作家と交友、印象派の作品展にも出品したが、辛辣なカリカチュアで有名になる。当時の有力紙「フィガロ」*Figaro*などに作品を掲載した。カラン・ダシュと『横笛』誌 *Le Fifre* を創刊、政治的諷刺詩を発表する。ドーミエやロートレックに認められた彼は、パリ生活の情景を痛烈な機智で描写した。水彩画やパステル画には、マネやドガに対する賞賛がみられる。晩年は宗教的テーマの作品を描いた。

18) Vincent Willem van Gogh（1853-1890）：新教の牧師の6人兄弟の長男として生まれた。伯父が富裕な画商で、彼のお蔭で16歳の時から絵画修業を始めた。美術商のグーピル商会の店員として、ハーグ、ロンドン（1873-74）、パリ（1875）などの支店に勤務し、その間に美術への愛好心を涵養した。ロンドンで初恋をし失恋、この悲劇が生来の孤独感を更に強化する。幼少時から宗教心が強かったため、牧師を志願しブリュッセルの神学校で勉学、資格を得て、ボリナージュ炭鉱町に派遣された（1879-80）。しかし炭鉱夫の生活の現実に直面、キリスト教の愛を説くだけの無力を実感し、伝道活動を放棄する。しかしキリスト教に幻滅しても、人間に役立ちたいという思いは捨てる事はなかった。この挫折と精神苦悩から彼が立ちなおったのは、絵画製作の情熱だった。彼は両親の家で、画の修業を独学で続行、17世紀のオランダ画絵の巨匠、特にルーベンスに魅了された。1886年にパリに上京、ここで彼の後任としてグーピル商会の店員になっていた兄のテオに再会、それ以後、この兄は不遇な弟に経済的援助を支え続ける。印象派の絵画に関心を持ったゴッホは、陽光溢れる南仏プロヴァンスに赴く。1888年2月、アルルに定住したゴッホは友人のゴーガンを招き共同生活をし、相互に影響を与えながら創作に没頭した。傑作「ひまわり」をはじめ南仏の風景画を描いたが、やがて精神に異常をきたし、何度も発作を起し、1888年のクリスマスの日には耳を剃刀で切り落すという自傷事件を惹起した。このためアルル近郊の病院にゴッホ自身の要請で入院した（1889.4.）。ここに入院してい

た約1年の間に多くの傑作を描いた。1890年5月、パリに帰り、郊外のオーベール・シュル・オワーズに移住したが、同年7月27日に自殺を計り、2日後の29日に死亡した。その強烈な色彩とリズムカルな線、情熱的な画面に躍動する自然、精神の内奥まで表現した肖像画で、ゴッホは現代絵画に絶大な影響を与えている。

19) Gustave Charpentier (1860-1956) : フランス東部ドイツと国境を接するモーゼル県の小都市ディユーズ生れの作曲家。マスネーに学び、1887年にローマ大賞を受賞した。交響曲のシリーズ『イタリアの印象』*Les Impressions d'Italie* (1891) で名声を得た。祭典用の『ミューズの戴冠式』*Couronnement de la muse* (1897) なども作曲したが、代表作は『ルイズ』*Louise* (1900) で、「音楽ロマン」roman musical と作曲家自身が命名し、抒情的で情感豊かな色彩に富んだリアリズムの構成を持つ詩情溢れる作品で、彼の代表作となっている。

20) Jean Eugène Auguste Atget (1857-1927) : 南仏ジロンド県の中都市リブルヌに生れ、幼少時にパリに移住した。船員や役者など幾つかの職業を転々としてから、大型組立カメラを入手、絵画の下絵の写真を製作 (1899)、やがてパリの風景、市民生活、記念建造物など多くの記録写真をとった。パリの歴史的記念博物館に約12,000点の作品と約4,000枚のガラス原版が、ニューヨーク近代美術館にも約10,000点の作品と約2,000枚の原版が所蔵されている。近代リアリズム写真の原点として評価がたい。

21) rue Campagne-Première : 第14区にあり、モンパルナス大通りとラスパージュ大通りを結ぶ、長さ266米、幅12米の通り。この通りは、18世紀の末頃はモンパルナス小路の名で野原を走っていた。1797年に工事が開始され、3米の道幅しかなかったので、1835年に拡幅工事がなされた。地主のタポニエ将軍が自身が参戦したヴィサンブル会戦 (1793.10.13.) を記念して、この新道に「初戦」通りと命名した。ドイツ国境に面するバ-ライン県のヴィサンブルには要塞が建設されていたが、オーストリー・プロシヤ連合軍の猛攻の前に陥落している。この通りの9番地に万博 (1889) の建材を利用して家がつくられ、100あまりのアトリエが出来上り、多くの画家たちが住んでいる。17番地の5階建てのマンションも、アトリエがつくられている。この通りには多くの芸術家が住んだが、3番地にモジリアニ (1884-1920) が住んだ。

22) Henri, 通称 le Douanier Rousseau (1844-1910) : フランス西部マイエンヌ県の県都ラヴェルの出身。ブリキ屋の息子。代訴人の使用人になり、一寸とした詐欺の結果、7年間の懲罰的徴兵に服し、メキシコ遠征に参加したという。1868年に兵役を免除され

除隊、パリの公証人役場に書記として勤務、1871年に市役所の吏員として入市税関 Octroi に配置された。税関吏 douanier という綽名は正確でない。全くの独学で絵画修業をし、ルーヴル美術館の模写の許可をもらい、ブージュロー（1825-1905）、ボナ（1833-1922）、ジェローム（1824-1904）を愛好し、助言をもらっていた。画家仲間との交遊の機会をえて、1886年からアンデパンダン展に出品するようになる。しかし彼の画風は当時の画壇の流れとは隔絶していたため、全く注目されなかった。批評家の嘲弄的になっていたルソーを弁護したのは作家のアルフレッド・ジャリ（1873-1907）である。彼は自分と同郷のラヴェル出身のルソーの絵画を詳細に検討し、独創的な構成や色彩に着目、旧套墨守のアカデミックな批評に反論し、彼をレミ・ド・グールモンに紹介した。アンデパンダン展の仲間たち、友人となったアポリネール、ピサロ、ルドン、ドガ、ロートレックたちもルソーの独創性を称揚したため、次第にルソーの真価が容認されるようになった。彼の現実観察と想像力が渾然一体となり、エクゾシズム溢れる強烈な色彩で描かれた画面は、不可思議な魅力を醸成している。ジャリ、マリ・ローランサン、ピエール・ロティらの秀逸な肖像画も残している。

23) Moulin-Rouge：第9区から第18区にのびるクリシー大通り（長さ935米、最小幅42米）の82番地にある。ロマン主義時代から既に「白い女王のダンスホール」le bal de la Reine-Blancheの跡地に、1889年5月1日に開場した。創業者はジョゼフ・オレール、ザドネール、ルナルらである。マビューユの息子がオーケストラを指揮していた。有名な演し物はカンカン踊りで、La Goulue, Rayon d'Or, Grille d'Egout, Nini Patte-en-l'air, Valentin le Désosséなどの有名なダンサーが出演していた。ホールは多くの木立があり、多くのアトラクションが催されていたが、決闘もよく行われた。1900年頃から、ムーラン・ルーージュは大スペクタクルのレビューやオペレッタも演じた。地下室を立派な酒場に改造したのは、1907年の事である。1915年1月には火事で焼失したが、再建され繁栄を取り戻した。風車は昔のものを修繕して使用している。

24) le Divan Japonaise：第9区から第18区にのびるマルティール街（長さ885米、幅10から12米）の63番地にあった。通俗詩人のジャン・サラザンが、次に小唄の芸人マキシム・リスボンヌが1883年から1892年まで経営していたカフェ。ここで「新婦の床入り」Coucher de la Mariéeと題して、パリで最初にヌードの女性が登場した。但し本当の裸体でなく、少し透けて見える肌着をつけていた。現代からみればなんという事もないが、当時は一大スキャンダルとなったのである。1908年、『浮世の喜劇』Comédie-

Mondaine となり、後に映画館になった。

25) Yvette Guilbert (1867–1944) : パリ生れのシャンソン歌手。蒼白い顔に赤毛の彼女は、白い手袋をつけて歌う当時のシャンソン歌手の慣例に反し、貧しい彼女は黒い手袋をして歌い、それが彼女の舞台衣裳の特徴となった。パリの庶民、貧乏人の生活の哀歎を歌い人気を博した。多くのコンサートや外国公演も行い、フランスの民衆の魂を歌で紹介したシャンソン大使の役を演じた。中世の哀歌からベランジェやナドールの詩も歌って、レパートリーは広がった。彼女はどちらかというと、歌うより、歌詞を語るのに力点を置き、メロディーより歌詞の内容や意味を伝えようとした。彼女の知性とエスプリは多くの知識人からも愛され、ロートレックは彼女を見事なポスターに描いている。

26) Gustave Nadaud (1820–1893) : 音楽家、シャンソン作家。多くのシャンソンを作詞作曲した (約 300 曲)。最も愛唱された曲は「マビューの女王たち」*Les Reines de Mabilille*、「グレゴワール博士」*le Docteur Grégoire*、特に「二人の憲兵」*Les Deux Gendarmes* である。シャンソンやオペレッタの他にコントや小説も書いている。

27) Aristide Bruant (1851–1925) : フランスのシャンソン歌手。1875 年頃から自作のシャンソンをモンマルトルのカフェ「黒猫」で歌い有名になり、サリスの後を継いで「黒猫」を買収し、「横笛」*le Mirliton* と改名、経営に当ると共に歌手として出演した。一般庶民の俗語を使って、パリ郊外のパリ市民の日常生活を哀愁と諷刺をこめて歌い、19 世紀末の社会の無政主義的感情を反映させ、絶大の人気を得た。自作のシャンソン集『街で』*Dans ln rue...* (1889–1909, 3 巻) 他、『20 世紀俗語辞典』*Dictionnaire de l'argot au XX^e siècle* (1901) などの著書がある。

28) Pierre Paul Marsalès Polin (1863–1927) : パリ生れのコミック・シャンソン歌手。羊の鞣革の赤いキュロットをはき、ぴったり体にあつた上着を着て、小さな軍帽をかぶり、格子縞の大きなハンカチをたらし、見せかけの素朴さと溢れる機智を發揮し、パリの劇場の舞台上で、愉快的な兵隊を演じた。出演した劇場は Eden-Concert, Scala, Alcazar など一流の舞台だった。また優秀な喜劇役者でもあり、ジョルジュ・フェドー (1862–1921) の作品を得意とした。またシャンソン歌手としても多くのヒット曲を歌った。「ローズ嬢」*Mademoiselle Rose*、「小さなトンキン娘」*La Petite Tonkinoise* などがある。

29) Remy de Gourmont (1858–1915) : ノルマンディ地方のオルヌ県出身。カン大学法学部で学び、26 歳で国立図書館司書に就職 (1881) したが、10 年後に愛国主義を嫌悪した評論『愛国主義の玩具』*Le Joujou patriotisme* を発表したため免職となった。

生きた百科辞典ともいふべき該博な知識の持ち主で、なほかつ鋭敏な批評眼と緻密な観察力の所有者であった。彼は「メルキュール・ド・フランス」誌の有能な編集者として(1889-1914)、象徴主義運動を支援、またその理論家として健筆を揮った。詩集、小説、戯曲、評論など多くの著作を残したが、代表作は『仮面の書』、『文学散歩』*Pomenades littéraire* (1904-13, 5巻)などである。

30) 『仮面の書』*Le Livre des masques* (1896-98, 2巻)：グーモンが支援した象徴派の詩人たち、マラルメ、ヴェルレーヌ、ランボー、メーテルランク、ヴェラーレンらの人物評論集。エッセイ風の簡潔なスケッチ風のものであるが、象徴主義とは芸術における個人主義である、と定義している。明快かつ軽快で流麗な散文は、フランス語の文章のお手本の如くで、広く外国でも愛読されている。現代でも象徴主義を知る上で、同時代の貴重な証言として、象徴主義入門の重要な文献である。

31) *Mercur de France*：1890年、アルフレッド・ヴァレットにより創刊された。最初は月刊、1905年から月2回、1939年から再び月刊、1940年から46年にかけて一時休刊、同年末から月刊誌として復刊、1965年に廃刊となった。創作欄には、サマン、ルナール、ゲールモン、ラフォルグ、ブロワ、アンリ・ド・レニエ、メーテルランクら、主として象徴派の作家の作品を掲載し、また批評欄や雑報欄には美術、音楽、演劇、外国文学の作品紹介など、多方面の記事を發表している。

32) Félix Vallotton (1865-1925)：スイスのローザンヌ出身の画家。パリに上京、アカデミー・ジュリアンに学び、ナビ派の画家たちと交流し、展覧会にも出品したが、ナビ派からは基本的に独立していた。彼は木版画に熟練し、多くの新聞や雑誌に作品を提供した。版画集の中で、彼は辛辣な機智を發揮(『罪と罰』*Crimes et châtements*)した。また日本画の画法を修得し、大胆な遠近法の短縮法と省略的画風をもって、黒と白の単一のコントラストで画面を構成した。そこには多くの画家たち、ホルバイン、マンダラ、リアリズムの画家たちからの影響がみてとれるが、特に分描派の影響が顕著である。熟年に達してから彼は強烈な色彩で、ぎこちないポーズをとった女性のヌードも描いている。

33) Jacques Doucet (1853-1929)：パリ生れのデザイナー、フランス美術愛好家の彼は『美術及び考古学目録』*Répertoire d'art et d'archéologie*の出版に貢献、パリ大学に美術と文学の重要な図書を寄贈したが、それらは後にサント・ジュヌヴィエーヴ図書館と美術考古学館に分与された。

34) Georges Bottini (1873-1907)：パリ生れの画家、版画家。同時代の風俗や生活

の観察者として、彼の水彩画は画材、テーマ、リトグラフともにロートレックの作品に類似している。しかしロートレックの作品に比較すると、人物の出来栄も観察力の辛辣さも劣っている。彼はジャン・ロラン、本名ジャン・デュヴェル (1855-1906) の *La Maison Philibert* の挿絵を描いている。

35) théâtre des Folies-Bergères : 第9区にあるリシエル街 (長さ 380 米, 幅 18 米) の 32 番地にある。この土地は 15 世紀末頃からカンズ・ヴァン病院の所有で、病院は野菜農家にこの土地を貸していた (1606-1805)。1860 年にこの場所に大きな寝具商店 Aux Colonnes d'Hercule が建造され、1869 年に劇場フォリ・ベルジュールが増築され、後に商店は劇場に吸収合併される。この劇場は「弾むスプリング・ホール」Salle des Sommiers Elastiques と笑談めかして呼ばれた。開場は、1869 年 5 月 2 日、支配人はアルベル・ボワレーヴである。しかし興行がうまくいかず閉場をくりかえし、1870 年 12 月にはパリ包囲中にも不拘再開されたが、1871 年 3 月にまたもや閉場になる。同年 11 月に再開した時、新任の支配人サリが劇場を全面改造し、リシエル街に面する正面入口を拡大し、立見席を新設した。オーケストラとバレエとあらゆる見世物のお蔭で、劇場は流行の中心になった。1880 年の末、サリは「パリ・コンサート」Concert de Paris と銘打って当時の大作曲家、グノー、マスネ、サン・サーンスなどの支援を得て音楽会を開催したが (1881.5.), 興行的に失敗、中止して本業に戻った。

36) Casino de Paris : 第9区のクリシー街 (長さ 670 米, 最小幅 12 米) の 16 番地から 38 番地にあったフォリ・リシュリユー (1730-1805), ティヴォリ 2 番館 (1811-1826) の跡地に建設された。1842 年にモンセ街がこの遊園地の附属の建物の北隣りに開通したが、それ以来、カジノ・ド・パリ (1890), アポロ (1959 年に取り壊し), パリ劇場などが、かつてフォリ・リシュリユーの繁栄の跡地の一角に建造されたのである。このダンサーたちは奔放な美女たち揃いで有名だった。

37) théâtre de l'Olympia : 第2区と第9区を走るカプシーヌ大通り (長さ 440 米, 幅 35.4 米) の 28 番地に、1893 年 4 月 12 日に開場した。小屋主はムーラン・ルージュの支配人ジョゼフ・オレールである。1928 年から 53 年まで映画館になっていたが、現在は新規のミュージック・ホールになっている。多くの有名なシャンソン歌手がコンサートを開いて、パリ市民を熱狂させた。

38) Ghika : アルバニヤ出身のルーマニアの皇族一家で、17 世紀以降その多くがモルダヴィアやヴァラキアの皇族となった。リアーナはこの一族の一人と結婚したのであろう

か？

39) *L'Aiglon* : エドモン・ロスタン作の戯曲。ナポレオン1世を鷲に見立て、彼の嫡男であるフランソワ・シャルル・ボナパルト (1811-1832) を鷲の子とした。父の敗北と共に、彼は母マリア・ルイザに伴われ、彼女の実家のウイーンに行くが、愛情の無い母親の冷遇にあって、若くして死んだ悲運の皇太子として、フランス国民の同情的になっていた。しかし実際は祖父のオーストリー皇帝に愛され、ライヒシュタット公爵に敍せられ (1818)、宮廷生活そのものは平穏であったという。この戯曲は、1900年3月15日、サラ・ベルナール劇場でサラにより初演、大入り満員の盛況であったといわれる。56歳のサラが青年皇太子を演じて成功したのは、彼女の演技力もさることながら、ジャック・ドーセのアトリエの裁断師ポール・ボワレの製作した見事な衣裳も大いに効果をあげていた。

40) Jean Sully Mounet, 通称 Mounet-Sully (1841-1916) : フランス南西部ドルドーニュ県のベルジュラック市出身の俳優。コンセルヴァトワールで悲劇部門で首席、喜劇部門で第2席に入賞 (1868)、将来を期待された。最初オデオン座に出演、1872年にフランス座に移籍、1874年に正式の座員となった。彼はあらゆる劇の大役を見事に演じたが、特に『ル・シッド』のロドリグ、『アンドロマック』のオレスト、ハムレット、オイディプスが有名。

41) Cécile Sorel, 本名 Céline Seurre (1873-1966) : バリ生れの女優で、オデオン座の正式座員になるまで (1898)、パリの多くの劇場に出演していた。1901年にコメディー・フランセーズに移籍、1904年に正式座員となった。彼女の持つ抒情的雰囲気と華々しさは、古典劇、ロマン派劇を問わずいずれの主役も見事に演じさせた。モリエールの『ミザントロープ』、ボーマルシェの『フィガロの結婚』、ユゴーの『マリオン・ドロラム』、デュマ・フィスの『ドミ・モンド』などは、いずれも彼女のレパートリーに入っていた。また「カジノ・ド・パリ」のようなミュージック・ホールにも出演している。彼女の演劇を愛する情熱が、彼女の演じる登場人物に、湧き立つようなコケットリーと魅力を与えている。

42) 女流作家コレット (1873-1954) の『クローディーヌ』物として発表された4部作の主人公で、コレット自身が色濃く反映している自伝的小説である。少女クローディーヌが成長し、やがて結婚、家庭を持つまでが描かれている。残念ながら、誰の手によって劇化されたのか不明。ボレールも不明でした。

43) Dranem, 本名 Armand Ménard (1869–1935) : パリ生れの歌手。その珍妙なスタイル, パリの場末の庶民の言葉使い, 滑稽な曲を意識的に歌った彼は, 長い間パリ市民の絶大な人気を手中にしていた。リフレインを何度も繰り返すシャンソンを得意としたが, 軽快なおペレッタも巧妙に演じた。「グリーン・ピース」 *Les Petits Pois*, 「クリスマス・イヴ」 *Un soir de réveillon* などが代表作。彼はミュージック・ホールに出演していた芸人たちが老後の身を寄せるための養老院を建設している。

44) Georges Méliès (1861–1938) : 映画のシナリオ・ライター兼監督。パリのルーヴル・グラン校を卒業後, 機械工, 指物師, デザイナー, 画家, ブーランジェ将軍時代の *La Griffe* 誌のカリカチュア画家など多くの職業を転々とした後, ロベール・ウダン劇場の支配人となり, 趣味の手に熱中した。リュミエール兄弟の発明した映画に興味をそそられ, 映写機を購入しようとしたが失敗した。しかしこの新技術のもたらすであろう新芸術に夢中になり, エジソンの映画を上映, 次に自分で映画を創作するに至った (1896)。翌 97 年, 彼はモントルーユに世界最初の映画スタジオを建設する。97 年から 1913 年の間に, 彼は約 500 本の映画を製作するが, 3 つの主題に分類される。『シンデレラ』や『アラビアン・ナイト』などの妖精物, 『月世界旅行』や『海底 20,000 マイル』などのサイエンス・フィクション, 『ドレフュス事件』, 『ジャンヌ・ダルク』などの歴史物である。彼は生涯にわたって約 4,000 本の作品を製作したが, そのうち 120 本は保存されている。19 世紀初頭, メリエの「スター・フィルム」は全盛期を迎えたが, 職人気質の手仕事の製作に固執していたため, 映画を大規模な工場生産の仕事にしたパテ兄弟によって, プロデューサーとしては敗北してしまう。しかしながら映画演出の技術や特殊撮影の発明, 世界初の映画スタジオの建設など, 第 7 芸術と呼ばれた映画のパイオニアとしての栄光は彼のものである。

45) Place Pigalle : 第 9 区にあり, フロショ大通り, ピガル街, デュベレ街, クリシー大通りが合する半径 37.5 米の広場。昔の入市税徴収のため, ルドゥーが建築したモンマルトル税関の跡地で, そこにあった噴水の周囲に 1862 年から 1910 年頃まで foire aux Modèles という市が立っていた。1827 年に半円形に建設されたこの広場は「モンマルトル城柵」 *Barrière-de-Montmartre* と呼ばれたが, 1864 年から現在の名になった。7 番地にあったキャバレー *Le Rat mort* にはガンベッタ, ヴァレス, クールベ, マネ, コペなどが常連だった。また 9 番地のカフェ *Le Noavelle-Athènes* は 1870 年の開店だったが, 画家のロートレックやフォラン, 作家のモーパッサン, ユイスマンス, ゴラなどが常連だっ

た。

46) Restaurant Maxim's : 第8区のロワイヤル街3番地にあるパリ随一の有名なレストラン。Maxime Gaillardによって1890年に創業開店した。彼は近くの23番地のバーで働いていたが、1890年7月14日、ショー・ウィンドウにドイツ国旗を掲げたため略奪にあい、破産同然になったイモダというアイスクリーム屋だったこの店を買ったのである。創業者のマキシムは間もなくマドレーヌ広場のレストランDurandの給仕頭ユージェヌ・コルニッシュに買却する。次のマックス・ルボディーの代になり多くの貴族たちを誘引する有名レストランになった。

47) Siegfried, 通称Samuel Bing (1838-1905) : フランスの蒐集家。製陶業者であった彼はフランスにおけるジャポニズムの推進者の一人で、1895年に創刊した雑誌*l'Art nouveau Bing*によって様式の革新を準備し、1900年の万博における近代様式のマニフェストを起草した。

48) Louis Majorelle (1859-1926) : フランスの装飾家。ナンシー派に属している。彼の製作した家具は植物による装飾が施されている。主要作品の数点は装飾芸術博物館に展示されている。

49) Emile Gallé (1846-1904) : フランスのガラス工芸家、陶芸家、指物師。ナンシー派の中心人物として、1874年にガラス工芸のアトリエを開設、1883年には高級家具製作所も創設した。植物学や昆虫学からモチーフを得て、見事な技巧でカットグラスや家具の装飾に活用した。その優美な作品は千変万化の色彩の効果により、美術工芸品の名に値する傑作であった。象徴主義的夢想到誘いこむ作品は、正にArt Nouveauを具象化したものであり、ガレをこの新芸術のリーダーたらしめている。

50) *Pelléas et Mélisande* : ベルギー人の作家モーリス・メーテルランク (1862-1949) が、1893年に発表した5幕13場の象徴悲劇。これをドビュッシーがオペラに仕上げた。メリザンドの夫のグロー老公が義弟ペレアスと妻の不倫を疑い、ペレアスを殺害、メリザンドから不貞の自白をとろうとして拷問死させる筋で、当時劇壇を支配していたアントワープの自然主義に真っ向から挑戦した神秘的象徴的夢幻的雰囲気を持つ作品だった。音楽面でも圧倒的な影響力を持っていたワグナーの構成にも、イタリア・オペラの伝統にもそぐわない、魂の内面を赤裸に歌う詩情溢れる雰囲気醸成しており、古典主義的簡潔さに復帰する作品として、楽劇史上、重要な地位を占めている。演劇作品としてパリに初めて紹介したのは、詩人ポール・フォールらが設立した「芸術座」théâtre d'Art (1890-93)

といわれるが、この劇団の後を継承した俳優のリュニエ・ポー（本名オーレリアン・マリ・リュニエ、1870—1940）が創立した「製作座」théâtre d'Oeuvre（1893）で続演されている。しかしドビュッシーが作曲したオペラが最も有名で、多くの反響を呼んだ。1902年4月30日、パリのオペラ・コミック座の初演は第2幕から観客の非難の野次と口笛と嘲笑で、歌声が掻き消されてしまう。批評家たちは、メロディー、ハーモニー、リズムの3大基本を全く無視した作品で音楽になっていない、と酷評し、ドビュッシーを「音楽のアナーキスト」と断じたのである。しかしながら、少数だったが、このオペラのインスピレーションと表現の独創性を認めた批評家（「フィガロ」紙のHenry Bauer）もいた。いづれにしろ、この作品は、当時の音楽界におけるスキャンダルとして耳目をひいたのである。

51) Sergei Pavlovich Diaghilev (1872—1892) : ノヴゴロドの貴族の家に生れた。ロシア・バレエ団の主宰者、芸術批評家。友人と刊行した『美術世界』*Мир Искусства* (1898—1904) でロシア美術を紹介、展覧会を開催して美術界に新風を送った。ペテルブルグの国立劇場に採用されたが (1899—1901)、辞職し興行師となり、パリのオペラ座でムソルグスキー作曲のオペラ「ボリス・ゴドノフ」などを上演、シャリヤーピンらの熱唱で大成功をおさめた。1911年、マリンスキー劇場の新進ダンサー達を中心に、「ロシア・バレエ団」を結成、パリのシャトレ座で第1回公演を行い、大成功をおさめた。演し物は、「レ・シルフィード」「イゴール大公」などの新作バレエだった。これ以後毎年定期的公演をパリ、ロンドンなどで挙行した。ロシア革命後は、パリとモンテカルロに本拠地を移した。彼は多くの優秀なダンサー達、ニジンスキー、カルサヴィナ、ニジンスカ、ダニロワなどを育成し、また有名な音楽家達、ドビュッシー、ラヴェル、サティ、ストラヴィンスキー、プロコーフィエフらに新曲を依頼し、それを新作バレエに仕上げた。また舞台装置には画家達、ピカソ、ブラック、ドラク、ルオーらに依頼し、斬新な舞台背景を実現した。注目すべき作品は、「火の鳥」*L'Oiseau du feu* (1910)、「ペトルーシカ」*Petrouchka* (1911)、「春の祭典」*Le Sacre du printemps* (1913) などがある。

52) Leon Nikolaevich Bakst, 本名 Rosenberg (1868—1924) : ロシアの画家、舞台装飾家。ペテルブルク出身。帝室美術学校ついでパリで学び、ペテルブルクやモスクワで風俗画などを製作。1906年パリに上京、ジアーギレフのロシア・バレエ団のため多くの舞台装置を製作した。「クレオパトラ」(1909)、「シェラザード」(1910)、「眠れる森の美女」(1921)、ムソルグスキーの「ボリス・ゴドノフ」の舞台装置も製作した。パリで死

去 (1924.12.27.)。

53) Alexandre Nicolaievitch Benois, ロシヤ式の綴りは Aleksander Nikolaevich Benua (1870-1928) : サント・ペテルブルグ出身のロシアの画家、舞台装飾家で、フランス人の血統をもっている。彼はジアーギレスらと *Min Iskousstrava* (「芸術界」 *Le monde de l'Art*) を結成した。彼は17世紀のフランス・オペラやイタリアのコメディ・デラルテ、ロココ美術やロシア民話の中にインスピレーションを発見し、多くの舞台装置をジアーギレフやストラヴィンスキーのために製作したが、なかでも「ジゼル」(1910), 「ペトルーシカ」(1911) のものが有名である。

54) Igor Fedrovich Stravinsky (1882-1971) : サント・ペテルブルグ近郊に生れたロシアの作曲家。後にフランスに (1934), 次にアメリカに帰化し (1945), ニューヨークで歿した。父は帝室歌劇団の歌手だった。彼は最初法律を学んでいたが、19歳の時、ハイデルベルグでリムスキー・コルサノフに会って音楽の道に進む決心をし、25歳から彼に学んだ (1902-1908)。初期の作品は、ドイツ・ロマン派、ロシア国民楽派、フランス印象派などの学風の折衷的なもので、まだ個性を発揮していなかった。ロシア・バレエ団主宰のジアーギレフの依頼で作曲した「火の鳥」(1910) が彼の見事なデビュー作となり、名声をもたらした。バレエ団に同行してパリに上京、そこで発表した「ペトルーシカ」(1911), 「春の祭典」(1913), 「ナイチンゲール」(1914) の3作で揺ぎない巨匠の位置に着いた。強烈な野性的リズムと変幻自在な管弦楽法の使用は、20世紀前半の音楽界に大きな影響を与えた。第1次大戦と祖国の革命の騒乱の間はスイスに亡命し、後にフランスに戻り定住し、帰化した (1919-1939)。しかし第2次世界大戦の勃発と共にアメリカに移住、最初ハーヴァード大学で教鞭をとったが、後にハリウッドに移つり、アメリカに帰化した (1945)。1920年前後から彼の作風は、大規模な管弦楽曲から小編成の民族色の稀薄な現代音楽的作風に変化していく。絶対音楽への関心のたかまりから、新古典的傾向を示し、一作毎に革新的な試みを続けているが、初期作品の如き傑作がみられないのが残念である。

55) Vaslav Nijnsky (1890-1950) : キエフ生れのポーランド系のロシアの舞踊家。ペテルブルグの帝室舞踊学校を卒業し、同地のマリンスキー劇場でデビューした (1907)。ジアーギレフに認められ、彼のロシア・バレエ団に参加、パリ公演で「レ・シルフィード」「シエラザード」に主演し、完璧な技巧を輝くばかりの肉体美で、それまで女性のプリマしか見ていなかったパリ市民たちを驚倒させた。パリでの第3回公演の時は、「バラの精」

「ペトルーシュカ」を踊って、世界第一の男性舞踊家の評価を得た。その翌年 1912 年に初めて振付けを担当、「牧神の午後」「春の祭典」などを担当した。南米巡業中にジアーギレフの目を盗んでハンガリー出身のダンサーと結婚したため、ロシア・バレエ団を解雇された。その後、自分でバレエ団を組織して巡業したが、いずれも失敗、舞踊界から引退、痴呆症にかかりロンドンで歿した (1950.4.8.)。

56) Tamara Karsavina (1885-1978) : ペテルブルク出身のロシアの舞踊家。同地の帝室舞踊学校を卒業した後、ニジンスキーと同じくマリンスキー劇場でデビュー (1902)、ジアーギレフに招かれロシア・バレエ団に入り、パリ第 1 回公演で、その美貌と完璧なテクニックと巧妙な演技で最大の人気を集めた。「イゴール公」、「レ・シルフィード」、「ペトルーシュカ」、「バラの精」、「火の鳥」、「ダフニスとクロエ」などに主演し絶賛を博し、パリのオペラ座で「ジゼル」も成功している。イギリスの外交官ヘンリー・ブルースと結婚し引退 (1926)、ロンドンに定住してからは、後進の教育にあたった。

57) Caraman-Chimay : カラマン家はプロヴァンス地方に定住したフィレンツェ出身の一族。最も有名な人物はミディ運河建設の推進者の一人ピエール・ポール・リケ (1604-1680) である。彼はこの功績でカラマン伯爵に叙せられた。この一族は 18 世紀末にシメー公団を継承した。

シメーとはブランシュ川に臨むベルギーの町で、シメーの領主は、1473 年にシャルル・ル・テメレルにより伯爵に叙せられ、1486 年に神聖ローマ皇帝により公団として認可された。この公団は結婚などにより所有者が変り、最終的にリケ・ド・カルマン家のものとなった。

58) rue d'Astrog : 第 8 区にあり、ヴィル・レヴェーク街とサン・トーギュスタン広場を結ぶ、長さ 280 米、幅 10m の通り。この道路はロケピーヌ侯爵アストローグ・ドバレード将軍の所有だった昔の沼沢地の上に建設された。これは近くのヌーヴ・サン・シャルル兵営の兵士たちがシャン・ゼリゼに演習に行く便利さのためである。この道は、1778 年と 1840 年に延長され現在のものとなった。12 番地にポルトガル公使館があった (1865)。ホセ・ド・パイヴァ公使は、パイヴァ侯の従弟だった。

59) la duchesse de Guermante : プルーストの傑作『失われた時を求めて』全 7 編 15 巻のうちの第 3 編『ゲルマントの方』*Le Côte de Guermante* (1920-21, 全 3 巻) の主要人物で、中世以来の名門貴族として描かれている。

60) François Auguste René Rodin (1840-1917) : パリ生れの彫刻家。デッサン・

数学学校（現在の国立装飾美術学校）を卒業、カルポー（1827—1875）などについて修業し、26歳の時に「鼻のつぶれた男」*L'Homme au nez cassé* をサロンに出品したが落選した（1864）。1871年以降はブリュッセルに滞在し製作に励んだ。その間ローマやフィレンツェを旅行、ミケランジェロなどの作品に感動した。1874年のサロンに「青銅時代」*L'Age d'airain* を出品。その写實的迫真力が注目され、非難と名声を同時に入手した。1879年の「洗礼者ヨハネ」*Saint Jean-Baptiste* で才能を全開させ、装飾美術博物館の正門の製作の依頼を受け、ダンテの『神曲』から想を得た「地獄の門」*La Porte d'Enfer* の製作に取り組んだが（1880—85）、残念ながら未完に終わった。しかしこれ以後、彼は「カレーの市民」*Les Bourgeois de Calais*（1884）、バルザックやユゴーの彫像、「考える人」*Le Penseur*、「接吻」*Le Baiser* など多くの傑作を世に送った。鋭敏な写実の技法を駆使し、人間の内面の精神の喜怒哀楽と生命の躍動を具象化したロダンは、近代彫刻の開祖と称せられる。

61) Odilon Redon (1840—1916)：ボルドー生れの画家。14歳でゴランにデッサンを習い、植物を描くのに特に興味をもった。1863年からパリのジェロームのアトリエで勉強したが、得るものはあまりなかった。彼はリトグラフにも手腕を発揮し、また『聖アンワヌの誘惑』（1888—96）や『悪の華』（1890）の挿絵も描いている。自然主義や印象派に捕われず、無意識が生じる映像を描こうとしたので、彼はしばしば神秘的な世界の中に幻想的だが写實的な怪物を描き込んでいる。1890年以降はパステル画に転じ、独得の不可思議な色彩で、花や女性を描き、シュルレアリスムの先駆者とみられている。

62) Anna Elisabeth, princesse Brancovan, Comtesse Mathieu de Noailles (1876—1933)：ルーマニアの名門ブランコヴァン大公家の出。パリで生れ、1897年に伯爵マチュー・ド・ノアイユと結婚、処女詩集『千々の心』*Le Coeur innombrable* を出版（1901）、アカデミー・フランセーズの文学賞を受賞して、注目の女流詩人となった。また上流社交界の名流夫人としてサロンを開き、その影響力はあらゆる方面に及んでいた。プルースト、パレス、コクトーらの作家たちの他にも、クレマンソー、ブリアン、カイヨー、ジョレスらの有力政治家も彼女のサロンの常連であった。詩人としては女性らしい繊細優雅な抒情を湛えたロマン派的作風で、『生者と死者』*Les Vivants et les morts*（1913）、『永遠の力』*Les Forces éternelles*（1920）などがある。

63) Reynaldo Hahn (1875—1947)：ヴェネズエラのカラカス生れの作曲家で専らフランスで活躍した。マスナーに学び、サラ・ベルナルルやプルーストと交遊した。「フィ

ガロ」紙の音楽評論家として記事も書いたが、流麗典雅なメロディーを用いて作曲をして流行作曲家となった。バレエ、オペレッタ、オペラ、室内楽などの作品を残したが、代表作はオペラ「ヴェニスの商人」*Le Marchand de Venise* (1935) があげられよう。

64) Jacques-Emile Blanche (1861–1924)：パリ生れの画家、作家、美術評論家。マネを中心とする印象派の影響を受けて花束やスポーツの場面を描いた。彼は貴族や有名作家たちの集う上流社会のサロンの常連で、多くの知名人の肖像を描いている。また美術批評家としては、ゴーガンやマネの評伝を書いている。

65) Isaac de Camondo 伯爵 (1851–1911) は、その蒐集品、18世紀の家具、ロマン派と印象派の画家たちの作品、彫刻、陶磁器、極東の美術品をルーヴル美術館に寄贈した。

66) Robert, comte de Montesquiou-Fézensac (1855–1921)：パリ生れの詩人、作家。1900年代の文壇のダンディーの代表の一人で、その個人的魅力で当時の名物男だった。彼の栄光はユイスマンスのデ・ゼッサント、ブルーストのシャルリュス男爵のモデルになったことにあるといわれる。詩集『蝙蝠』*Les Chauves-Souris* (1892)、『青い紫陽花』*Les Hortensias bleus*、『孔雀』*Les Paons* (1901) の他に、スノビズムの世界を描いた回想録『消えた足跡』*Les Pas effacés* (1927) などがある。

67) Paul Poiret (1879–1944)：パリ生れのデザイナー、装飾家。1904年にオーベール街に開店、女性を伝統的なコルセットから解放し、婦人服を一新、パリ・モード界のリーダーになった。店をフォーブール・サン・トノレ街次にシャン・ゼリゼのロン・ボワンに移転、豪華な演出でパリ中の人気を独占した。特に1925年の万博の時、セヌ川に、Amour, Délices, Orgues と命名した三隻の川舟に、当時の有名な舞姫イサドラ・ダンカンの東洋的魅力を横溢させたコレクションを満載して展示し、観衆を完全に魅了したのである。しかし第1次世界大戦による経営不安とシャネル、パトゥーらの新進デザイナーの進出により、オート・クチュールの世界から引退せざるを得なくなり、不遇な晩年を送った。『時代に服を着せて』*En habillant l'Epoque* (1931) と題する回想録を残した。

(続 く)

(追 記)

- (1) 参考図書などは,〔I〕の巻末に記載してありますので,そちらを御参照下さい。
- (2) 前稿〔XXIX〕に校正ミスがありました。下線の如く御訂正下さい。
p. 3. 下から 11 行目 上っ張りを着て
p. 10. 上から 3 行目 『退屈な社交界』

— 2009. 6 .14. —